

第1回親子社会科見学会 ～東海道、品川宿を訪ねて～

「大人の学ぶ姿を子ども達に見せることが大切」という理念のもと、本校初めての企画として中学 1 年生とその保護者の方を対象に第 1 回親子社会科見学会を 6 月 1 日(日)午後に実施しました。参加者は 14 組で、東海道五十三次の最初の宿場町、品川宿を訪ねました。

品川宿は江戸時代の宿場町で、池波正太郎の描く時代小説によく登場する江戸市中^{しちゆう}ではありません。つまり、江戸に隣接する宿場ということになります。現在の京浜急行線で言えば、「北品川」から「青物横丁」までのおよそ 3km^{かちしん}の道程に南から順に「南品川」「北新宿」「歩行新宿^{しゆく}」と呼ばれる 3 つの宿場がありました。北西から東流して江戸湾に流れ込む目黒川にかかる品川橋を挟んで右岸つまり南側が「南品川」、対岸の左岸が「北品川」、その北に「歩行新宿」と呼ばれる、その名の通り江戸中期になって拡大された新しい宿場がありました。そのため、現在の JR 品川・京浜急行品川駅の南にありながら、「北品川」という駅名が付けられた訳で、初めてこの地を訪れる人に多少の混乱を与えています。

品川宿、とりわけ「南品川」には街道に沿って古い町割が残されており、平行して庶民が使う脇街道が走り、その間には細い路地が今でも幾本も存在します。木造家屋が連なる路地や、かつて共同井戸として使われた井戸も残っており、その姿に江戸風情を感じることもできるでしょう。東海道は、西国からの数多く諸藩参勤交代に使った街道でもあり、人々も活発に往来し、その人を目当てに多くの商人や職人たちが活躍した場所でもありました。日本橋からわずか 2 里(約 8km)しか離れておらず、行き交う人々はここ



『安政改正御江戸大絵図』1858 年
灰色の部分が町屋(宿場)
赤色の部分は寺社、クリーム色
は武家地で藩名が記されている。



『江戸名所図会』1858 年広重
東海道(北品川)を行き交う人馬
右手に見えるのが砂州の獵師町

で真新しい^{ぞうり}草履や^{わらし}草鞋に履き替えたりしたり、小綺麗に身なりを整えて江戸を目指したと伝えられています。

しかし、実際に旧東海道を歩いて見ると、その道幅の狭さに驚くかも知れません。道幅はせいぜい 8 ～ 9m と、歌川広重等の描いた浮世絵や錦絵などからは想像できないでしょう。当時の絵画は人物だけでなく風景もかなりデフォルメされていたことが分かります。ついでに言えば、浮世絵では幕府の施設などは意図的に雲や雨などで隠されていました。

ところで、「南品川」では東海道に江戸湾がすぐ近くまで迫っており、海へと続く狭い路地や横丁を覗くと、地面が緩やかに海に向かってゆるやかに傾斜していることが分かります。東海道から海までの距離は、近いところではわずかに 10 メートル足らずしかありません。つまり、ここ「南品川」では、東海道は海沿いの道と言っても過言ではありません。創設 150 年の歴史を持つ区立城南小学校辺りでは、今でも当時の海岸線を示す石垣を確認することができました。

また、ここ「南品川」^{しもごえ}境界では、江戸湾へと続く緩やかな低地では、宿場町^{ほしか}から出る下肥(排泄物)や房総沖で捕れた干鰯などを利用して多くの野菜が栽培され、江戸野菜として有名な品川葱^{ねぎ}や品川蕪^{かぶ}などが作られ、取引されていました。その名残が京浜急行の駅名「青物横丁」に残っているという訳です。因みに、現在、「江戸東京野菜」として登録されている野菜は 50 品目にも上るそうです。また、目黒川河口の突端にある砂州には獵師町もでき、遠浅の海浜では「品川海苔(アサクサノリ)」も生産されており、「南品川」は農産物や海産物も集まる一大物流拠点だったことが分かります。



旧東海道（昭和初期の古い建物が残る）



江戸時代の海岸線を示す石垣



第4回しながわ宿場ナイト

前日 5 月 31 日の夜、北品川本宿では、江戸風俗の衣装を着た宴が催されたり、善福寺前ではマルシェも。2日も雨天中でしたが、開催されました。

/kitahon.jp/2025/06/02/syukubanight202505/
転載

丁度、私たちが訪ねた週末(6月6日)が『天王祭』で、南品川では荏原神社を、北品川では京浜急行線「新馬場」駅の西側に隣接する丘陵地にある品川神社を祭神として、たくさんの神輿も繰り出して賑わうそうです。この日も神輿を出して磨いたり、祭礼の準備に余念がありませんでした。右絵図では「天王社(○印)」と示されているところに当たります。ただ、現在の荏原神社が目黒川の左岸の畔にあることから、水害対策と沿岸部埋立工事のため、河川の改修工事が進められ、流路変更が行われたことも分かります。

途中、砂州で流路を北に変え、今では埋め立てられて八つ山通りとなった所を歩き、砂州の先端にあった弁財天を祀る利田神社も訪れました。ここは南品川の名主利田吉左衛門が無人だった砂州を開墾して獵師町を作ったことに因んだ場所です。ここでも祭礼の準備をしていましたが、神社の横には1798年に江戸湾に紛れ込んだ鯨を祀る鯨塚が残されていました。そのためか、北品川界限には今でも鯨をモチーフにした看板などがいくつもありました。

石飛 一吉

参考資料

ジョージ秋山(1975-2018)『浮浪雲』全112巻、小学館ビッグコミックスは南品川が舞台の漫画。



『芝 三田 二本榎 高輪邊』

